

新しき  
宗教生活

特230  
724

眞隆著



始



社報時化文・都京



# 序

人生を圓かに救ふものは宗教である、これはすべての人々によつて首肯されてゐるやうである。そこで宗教は要望せられてきた。現時の宗教復興の機運はかゝる意味において注意すべきである。

但、現時の宗教復興は漠然たる宗教への志向に動かされた點にあつて、難してゐる、宗教の假面を被れる俗信、宗教として調熟してゐない言行、これらがかかり勢力を得てきたかのやうである、仍つて、こゝに嚴かな批判と強い引導を要するのである。

わが親鸞聖人の宗教こそ、最も圓滑を極めた眞實の大道であることを確信する。そして、この大道を顯示することは、おのづから現代の宗教復興に批判を與へ引導をなすものであると期待する。

たまたま本派本願寺の當局から囑託せられて、人生の圓成に於ける宗教



の立場と道理とを、一般の人々にわかりやすく解説すべき機会を得たので極めて平明に、眞實の大道の開顯と履踐をのべたものが本書である。若し、この小著が宗教について正しい頌納を求めらるゝ方々に、何ほどの資助ともならば、まことに本懐の至りである。

昭和十年初秋

東山葛南小隱にて

梅原真隆



# 新しき宗教生活

第一講 何故に宗教を信すべき乎

## 三つの問題

このたび、人生と宗教との関係をどなたにもわかりやすいやうに解説をするやうにと懇囑をうけましたので、すこしばかりお話を申上げることになりました。いま宗教といふものゝ素描をなすについて、試みに三つの問題を注意いたしまして、これを順序を追ふて解説することにいたします。三つの問題といふのは、次のとおりであります。

何故に宗教を信すべき乎

第一、何故に宗教を信すべき乎

第二、如何なる宗教を信すべき乎

第三、如何にして宗教を信すべき乎

こゝに注意いたしました「何故」にといふこと、「如何なる」といふこと、及び「如何にして」といふことは、すべてのことを解釋する場合に注意せらるゝ三つの疑問符でありまして、これだけのことがわかりますと、ほと問題が解決されるかとおもひます。そこで、こゝにもかゝる方法をえらんだ次第であります。

人生そのものゝ約束

まづ、われら人間が「何故に宗教を信すべき乎」といふことは、根本的な疑問でありまして、多くの人々もこの疑問を抱懷してゐられるやうに見受けれます。

人間は何故に宗教を信すべき乎、この疑問に對して端的に答へたいとおもふことは「人間は宗教を信じなくては救はれないやうに出來てゐる」といふことであります。人間は何故に飯を喰はねばならないかといふと、人間は飯を喰はなくては生きられないやうに出來てゐるといふと同じことでもあります。

凡そ、人間は生きなくてはならない存在であります、完全に生きなくてはならない存在であります、そして、完全に生かされて行くことを宗教を信すると名けるのであります。宗教の意味は人生を根本的に救ふことであります。故に、宗教を信するといふことは、最も深められた生き方であり、最も圓やかに生かされた姿であるともいへませう、約言すれば、宗教を信するといふことゝ完全に生きるといふことは同意語であります。

### 三重の生活輪

人間の生活はひとつの纏まつた有機的な組織と體系をもつてゐるものであります、私はこれを試みに生活輪と名づけておきます。そして、この生活輪は三重に重疊されて居ります。即ち第一重は本能輪であり、第二重は理性輪であり、第三重は聖法輪であります。

第一重の本能輪と申しますのは、本能によつて動かされてゐる自然生活をさすのであります、これは主として肉體に即くものであります。この生活輪におきましては、「禍」をとりのけて「福」をつかまうとして働いて居るのであります。「福」といふのは自然の價値を享有することであり、尙ほ價値といふのは、やさしくまうしますと人間の生きることによつて役立つものであります。而してかゝる

福を欲求するところの本能輪における生活々動は呼吸し飲食し結婚し勞作をなすのであります。

第二重の理性輪といふのは理性によつて統制された理性生活でありまして、主として精神生活に屬するものであります。思想し批判して善を實現しやうとするのであります。善とは理性價値の實現であります。そこで惡を廢して善を修することを工夫いたします。もつとくわしくいへば偽と惡と醜とをとりのけて眞と善と美とを實現しやうと工夫するのであります。

第三重の聖法輪といふのは聖なる法によつて統括せられた生活であります。この生活輪について信心、念佛、禮拜、懺悔などが救はれて行くすがたであります。そして、これは「迷」を轉じて「悟」をひらくことを、目標としてゐるのであります。

御飯のいたゞき方

この三重の生活輪即ち本能輪と理性輪と聖法輪とは順次のごとく重疊されてあります。そして如何なる生活の斷片をきりとつてみましても、この三重の生活輪がつみかさねられてあるのであります。

たとへばこゝに御飯をいたゞくといふ日常の生活を注意してみましても、これが識別されるのであります。

まづ本能輪における御飯のいたゞき方は「おいしいものをおなかに一杯いたゞく」といふ享樂を求めめるのです。そしてこの自己の享樂をみたすためには、他人のものを奪つてなりとも喰はうといふことにもなり兼ねないのです。そこで「無理がかゝつても」欲しいものを奪つて喰はうとするのであります。

次に理性輪になりますと、こゝに物のことわりといふこと人間らしい道理といふことが發見されてまゐりますので、いかに欲しくても他人のものを奪うやうなことは不可であるといふことを考へて 本能に制限を加へます。そこで「正しく働いて正しい方法で御飯を合理的にうけとる」といふ心持になります。合理的といへば當然といふことを意味する。「あたりまへ」といふことを意味することになります。そしてさきの本能輪においては「無理がかゝつても」と押切つたものがあたりまへといふことになるので、たしかに一段の進歩であります。

ところが、この「あたりまへ」といふことが、もつと深められてくると、「あたりがたいことを見出されてくるのであります。私たちが八時間働いて三度の御飯をいたゞくといふことが、果して「あたりまへ」であらうか、果して當然であらうか。謙讓に一步しりぞいて反省することが大切でありませう。大聖釋尊は一粒

の米は須彌山よりも重いと仰せられました。一粒の米は黄金を須彌山ほど積んでも買ふことのできない価値があるといふことであります。言葉を換えていへば絶對の価値を見出されたのであります。一粒の米にこもうした絶對の価値を見出してまゐりますと、私たちが一日せつと働いたからとて、三度の御飯をいたゞくといふことについて「あたりまへ」といふ心持では落つけなくなつてまゐります。「あたりまへ」といふことが傲慢な感じがしてきます。この「あたりまへ」といふ心持を引裂いて、やがて「ありがたい」といふ心持が深められてくるのであります。働いてうけとる御飯をも「おかげさまでである、お養ひにあづかる」ことであると押いたゞくやうになるのであります。わが眞宗の中興であらせられました蓮如上人がいつでも掌を合して御飯をいたゞかれたといふことは尊いかぎりであります。これが聖法輪に安住するものゝ風格であります。

### 白毫の恩賚

佛教を信ずる人々の家庭では三度の御飯を「白毫の恩賚」といたゞきます。「白毫」といふのは佛の三十二相のひとつである白毫相のことです、そして、この白毫相の一分を佛弟子に供へてくださるのであります。「佛弟子は傍目ふらず一心に道を修行するがよい、衣食のことは氣にかけるに及ばない、白毫相の功德を興へる」と佛藏經にお説きなされてあります。これによつて佛弟子は耕さず紡かずに、佛物に衣食してお養ひにあづかるのであります。これを「白毫の恩賚」といふのであります。おもふにこの「白毫の恩賚」といふことは佛を念じて生かされるものゝ美しい感激であります。

このほど、ある地に佛教主義の幼稚園が創設せらるゝことになりました。する

とある若いお方ですが、大變ありがたいお方でありまして、その幼稚園の食堂へ「白毫の恩賚」といふ額をかゝげたいから、私にこれを揮毫して欲しいといふ懇囑をうけたことでもあります。私は字が拙いので、ある尊い和上におねがひをして御染毫をねがふことにいたしました。とにかくこれは趣のふかい贈物であると感じたことでもあります。

こうした風に三度の御飯を掌を合していたゞくやうになつたときは、聖法輪にふかめられ、宗教の境地に逍遙するときであります。

これは、かりに御飯をいたゞくといふひとつの事柄について具體的に三重の生活輪のことを申し上げたのでありますが、これはすべての事柄についても同様であります。結婚することにつきましても、商賣をなすことにつきましても、同様であります。

### 獸格と人格と法格

そこで、同じ人間生活といつても、外部から見れば同じことでもありまして、内部にたち入つてみますと、一様ではありません。内部には「人格」といふ言葉があります。若しそれをくわしく申しますならば、本能輪の生活を「獸格」とすれば、理性輪の生活は「人格」であり、聖法輪の生活は「法格」であります。若しかゝる名づけ方も一種の趣があるとする、人生は「法格」の生活まで深められて、はじめに圓かに成就せられるのであります。この聖法輪を宗教生活の境地と稱せられるのであります。この境地に參徹して、淨土への道がひらけ、佛果を證する道があたへられて、こゝに迷を轉じて悟をひらく永遠の解決が行はれるのであります。



かうした見方によつて、宗教生活が人生の最も眞實な生き方であることが示され、宗教を信ずることゝ眞實に生きることゝが同じことゝして意味づけられるのであります。

関却された聖法輪

こうした具合に人間の生活は三重の生活輪にかさなり合つて、しかもそれが有機的に組織されてありますが、このうちで、本能輪に於ける生活と理性輪に於ける生活の打捨てゝならないことは、すべての人々が知り抜いております。而してこれについては力のあらんかぎりを傾けて有効な生き方に工夫を凝らして居るのであります。

ところが、最後の聖法輪における生活については一般の人々はあまり多くの関

心をおもちになつて居ないかのやうに見受けられます。尤も、近頃は宗教の復興といふことが社會の耳目をひくことになりまして、宗教についての關心が次第に深められたといふことは事實であります。しかし決して充分とは申されませぬ。従つて、この聖法輪に於ける生き方即ち宗教生活の工夫に關して、切實な勞作もなく、行届いた培養も行はれて居ないかのやうであります。

そして、この人間に宗教的關心と工夫が乏しいといふことは、聖法輪に於ける生活が人間の生きるのに缺くべからざるものでないからといふ所爲ではなくて人間の生活が未だ充分に深められてない爲めであります。言葉を換へて云へば、宗教に關心をもたない人間の生活が行届かないからこのことで、宗教が人生に必要がないからではありません。この聖法輪まで掘りさげなくては、人生は圓かに成就しないのであります。人間が救はれないのであります。

墓穴を穿つ迷ひ

こんな風に申しますと、或ひは抗議を申立てられる方々があるかも知れませぬ。即ち、眼前には宗教を全く信じないでも立派に生きてゐる人々があるではないか、人間は飯を喰はなくては生きられないけれども宗教は信じなくとも生きられると考へてゐられる方々もあるかも知れませぬ。否な大多数の方々はこうした考へをもつてゐられるかのやうであります。けれども、これに就いて無遠慮に申し上げますと宗教を信せずしても生きてゐるといふ生き方は、本當に生きてゐられるのではなくて、實は滅びつゝあるのであります。自ら墓穴を掘つて居るのであります。また、かゝる生き方は實は生きてゐられるのでなくて、迷うてゐられるのであります。

蓮如上人が大阪の四天王寺の土塔會にお出ましになつて、群集の人々を御覽なされて「こんな澤山な人々はみな地獄に墮ちてゆくのか」とおなげきなされ、「たゞ念佛するものだけが淨土へ往生させていたゞけるのである」とおよろこびになつたといふことであります。この説話は現代生活の渦巻のなかに享樂し、論議してゐる人々にとつても、恐らくは深刻な警策であらうかと感じられるのであります。

價値の認識と履踐

さて、聖法輪まで掘りさげなくては人生々活が圓かに成就しないといふこと、即ち、宗教を信じなくては人間は本當に救はれないといふことを申しましたが、これについては、多少の註釋を加へておく必要があらうかと存じます。仍つて進

んでこれについて申述べることにいたします。

凡て、人間の生活といふことは、單に生れつきのまゝのものを引き伸ばすといふことだけで終るものではありません。若し、これだけで終るならば、生きることに ついて色々の勞作も要らないかほりに、また、生きることによるこぼしい意味も感じられないのであります。そこで人間が生活するといふことは、よりよく生き伸びるといふことでなくてはなりません。言葉を換へて申しますと、人間の生活といふものは、單なる生存の延長でなくて、かゞやかしい生命の伸展でなくてはなりません。たゞ生きてゐるといふだけでなくて、生き伸びることではなくてはなりません。生存でなくて生活でなくてはなりません。そこで、よりよく生き伸びるには、この生き伸びることに役立つもの、即ち生き伸びることに價値あるものを見届け取入れて、これを活かして行かねばなりません。價値の認識と實踐

が大切な勞作となるのであります。

### 自然價値と理性價値

その價値といふものについて、一般に認められるものは、「福」と「善」とであります。さきにもべましたとおり、本能輪の欲求するものは「福」であり、理性輪の願念するものは「善」であります。すべての人々は昔からこの「福」を求め「善」を念じて生活の工作をすゝめてきました。これが人間の歴史における一貫した努力のあとであります。そして、その努力が酬あられまして、人生々活は進展いたしました。人生々活は開發いたしました。この人生々活の進展と開發は「福」と「善」との累加を意味するものに外なりません。

近代人の生活には、むかしの人々の夢想さへすることのできなかつた幸福と善

根が内包されております。近代人は「より仕合せ」にそして「より善く」生活することになりました、けれども、近代人はこれによつて救はれてゐるでせうか。生活が圓かに成就してゐるといふことができませうか。こゝに大きな疑問が横はつてゐるのであります。人生々活において「善」と「福」との累加するといふことは、そのまゝ「悪」と「禍」との遞減を意味するものではないのであります。否、**「善」と「福」との累加することに比例して「悪」と「禍」も亦累加されて行くのであります。**これは極めて平凡な道理なのでありますが、この平凡な道理が一般に見落されてゐるために、「善」と「福」の累加することによつて、「悪」と「禍」が遞減せられるやうに誤り、その結果、人文の進化につれて、すべての「悪」と「禍」とがこの地上から影をおさめて、純全な「善」と「福」との世界が建立されるやうに想定してゐるのであります。古來、地上に天國をきづかんとして祈願したのは、この錯誤のう

へにあらはれたものであります。近時社會を改造してそこに淨土を建立せんと祈願する人々もまたこの錯誤におち入つてゐるのであります。

### 相對價値の制約と限界

それでは、どんなわけで「善」と「福」との累加に比例して、「悪」と「禍」もまた累加するのでありませうか。手短かに申しますと、自然價値も理性價値も共に相對價値であるからであります。「福」も「善」も共に相對價値であるからであります。すなはち、「善」には「悪」といふ暗い影がつきまとい、「福」には「禍」といふ暗い影がついてまわるのであります。

俱生神の説話はこの邊の消息を示唆するものゝ如くであります。俱生神の説話もいろ／＼ありますが、この内のひとつにこんなのがあります。人が生れると悉

く二つの神がついてゐる。一は同生と名づけ、他は同名と名づける。同生といふ神は女性であつて右の肩の上に、同名といふ神は男性であつて左の肩の上にゐられる。そして、同生神はその人の悪を記録し、同名神はその人の善を記録するといふのであります。この俱生神の説話は、人間の生活には「善」と「悪」とが最後まで對峙してゐることを示唆したものとしてみてもできませう。

おもふに、「福」を享樂するところの感覺は同時に「禍」を痛傷するところの感覺であります。また、「善」を憧憬するところの動き方は同時に「惡」を省察するところの動き方でもあります。それでありますから、近代生活におきましては、昔時の人々の經驗しなかつた幸福を享樂してゐる反面には、昔時の人々の經驗しなかつた禍害をも痛感してゐるのであります。また、近代人は昔時の人々の實踐しなかつた善根をつんでゐることも事實であります。また昔時の人々の犯したことの

ない惡業をつみかさねて居るのであります。

これによると進化論の見方、人生は段々進化して行くといふことも、一面においてはなりたつことではありますが、また、一面には人生は次第に末法となり濁惡になるといふ末法思想の見方もたしかに味うべきものであります。

こんな次第でありますから、相對價値の實現を企て、行く生活輪の段階においては「ある程度の生活」は實現もされますが、「圓かな生活」の成就はできないのであります。そして、この「圓かな生活」を成就するには、是非とも聖法輪の宗教まで深めなくてはならないのであります。

### 輪の背反と善惡の對峙

本能輪における自然生活におきましては、どこまで行きましても、「福」と「禍」

との背反を取去ることができないのであります。どんなに富貴な人々でありましても、また、どんなに権力のある人々でありましても、涙がこぼれるのであります。不仕合せの感じがなくならないのであります。

欲望といふものは極めて解けがたい謎でありまして、この欲望は充たすことによつて少くなるものではなく、寧ろ充たせば充たすほど多くなるのであります。この意味において本能の欲望は人間にとつては無窮の動力でもあります。しかしこれがために人間は生きんが爲めの悩みに虐げられて、生き得たるよろこびにひたることができなくなるのであります。「福」を享けて微笑む半面には、思ひがけもしない「禍」を背負はされて苦痛しなくてはならないやうに、人間ができてゐるのであります。

また、理性輪に於ける道徳生活におきましても、これと同じ矛盾をくりかへさ

ねばならないのであります。いかに修養し訓育し精進いたしましても、一切の悪をとりのけて、善の一切を行じつくすといふことはできないのであります。否、道徳生活を深めて行けば深めて行くほど、「善」と「悪」との對立が深刻になるのであります。

俚言に美しい人ほど白粉を多く使用するといひます。孝心のふかい人ほど親不孝をなげくのであります。また、愛のふかい人ほど愛し切れないさびしさに苦しむのであります。

これは一寸見ると矛盾のやうでありますが、實は矛盾でないのであります。善の意識が鮮明になるほど、悪の意識もはつきりしてきますのであります。光が強くなるほど闇の深さが感じられるのであります。これは相對價値をもとめて行くことの必然的なありさまであります。

### 高次のな圓成

かくのごとく人生の相對價值を實現して行く場面においては、自然輪においては、どこまで行つても「福」と「禍」との背反があり、理性輪においてはいつまで經つても「善」と「惡」との經緯がある。そして、この背反と經緯とを取除くことができなないといふことが見届けられたとき、人生はいかにして救ひを求むべきでありませうか、こゝに賦與せられたのが聖法輪でありました。本能輪の矛盾も、理性輪の經緯もすべてを、そのまゝうけいれて、これらを高次的に統括し調熟するのが聖なる法、即ち絕對價值の統一であります。

即ち、「惡」と「禍」とをとりのけて「善」と「福」を實現して行く相對的な行き方は、すつかりその趣を異にし「惡」と「禍」とをうけいれつゝ「惡」と「禍」をとほして

「善」と「福」をみがき出して行く絕對の統一であります。こゝに「禍」を轉じて「福」を成し、「惡」を轉じて「善」を成する妙趣があるのであります。これ聖法輪のもつ妙趣であります。

人間の生活がこゝまで深められたときに、はじめて力強く圓成する次第であります。あらゆる矛盾と解けがたい經緯とあるがまゝにうけ入れて、そのまゝ調和し解決する圓融無碍の畢竟依こそ聖法輪であります。

### 禍を轉ずる妙趣

「禍」をとりのけて「福」をつかむといふことは、何人にもわかりやすいのであります。が、「禍」をとほして「福」を成すといふこと、若くは「禍」を變じて「福」と轉ずるといふことは、解つたやうで解りかねることでもあります。これは「禍」に囚

はれないだけの立場にたち、「禍」をかみくだいて行くだけの強い力を有つこと  
 でなくてはなりません。そして、もつと高い幸福を幸福と見とゞけるだけの叡智  
 もひらけなくてはなりません。

越後の國上山の良寛禪師の五合庵の趾に

焚くほどは風がもてくる落葉かな

といふ句碑がたつております。この句碑についてひとつの傳説がつけくわへられ  
 てあります。

良寛禪師は聖貧の生活に終始されたお方でありまして、着のみ着のまゝ、そ  
 の日ぐらしの貧しい生活を五合庵でおくられたのであります。

あるとき、長岡の藩主が禪師の高風を慕ふてこの五合庵を訪れなされたとき、  
 藩主は五合庵のくらしをみて、あまりの佻しさを氣の毒におもひ、長岡の城下に

庵室をしつらひて禪師の生活を保證しやうと申出てた折、良寛禪師は藩主の好  
 意を感佩しながらも、和やかに辭退をしました、そして、かきつけたのが、この  
 一句だといふことであります。

五合庵の生活、それは貧しい限であります。貧しさは人間にとつて最もかなし  
 い禍であることは云ふまでもありません。良寛禪師にしたところで貧しさそ  
 のものをよろこぶ變質者ではなかつたのであります。けれども、この物の貧しさ  
 に禍ひされないだけの心の豊かさを享有してゐたのであります。

「焚くほどは風がもてくる落葉かな」この句は、この身ひとつが生かざるゝに  
 必要なものは不足なしに與へられるといふ法喜であります。人天の供養に生かさ  
 るゝものゝ豊かな悦びにみちゝた句であります。

貧に處していやしからざるこの氣品、貧しくして豊かなるこの法悦、こゝには



百萬長者の及びもつかない豊富、長岡藩主も比べものにならぬ安住があらはれて  
おります。

「禍」をとほして「福」を享有する無碍の力をこゝに會得しなくてはなりません。  
さらにこの境地にいたると貧しさは「禍」ではなくて、むしろ「福」と轉じてきます。  
即ち、貧しさが煩惱を淨化してくれるに適しい素材となつてくるのであります。  
こゝに聖貧の床しきがあることを注意しなくてはなりません。

### 三 光 と 三 毒

また、「悪」をとりのけて「善」を修することは、手慣れた道德の方途であつて、  
何人も直ぐにうなづくことができますが、「悪」をとほして「善」をみがくとか、「悪」  
を轉じて「善」をなすとかいふことは、どんなことでありませうか。これについて

は落ついて味う必要があります。

「悪」をとりのけて「善」とすることよりも「悪」をとほして「善」くなるには、どう  
しても聖なる力がなくてはなりません。さらに「悪」を消化し「善」を轉變するには  
聖化の妙趣をたゞへなくてはなりません。

凡てこの「轉」といふことは大乘佛教のもつ妙味のひとつであります。「轉」ず  
るとは滅ぼす意味もありますが、變ずるといふ意味もありまして、この轉變とい  
ふことが深い味ひをもつてゐるやうであります。この轉變といふことは、わかり  
やすく例へてみますと、澁い柿が甘くなるやうな趣致であります。この場合に柿  
はその澁味をとりのけて甘味となつたのでなくて、澁味がそのまゝ甘味となつた  
のであります。澁味がそのまゝ甘味となるには太陽の光、大地の培ひこうした大  
きな自然の力を要します。それとおなじやうに、われらの悪がそのまゝ善くなる

には、大きな聖化せいけによることはいふまでもありません、佛の力をいたゞき、佛の光ひかりを蒙かうつて、あさましいところが、そのまゝ、ありがたいところに變へんずるのであります。

佛の光明くわうめうは十二の徳にわかれたれてありまして、これを十二光くわうと申します。この十二光のうちには歡喜光くわんぎくわうと清淨光しやうじやうくわうと智慧光ちゐけいといふ三光があります。この佛の三光は凡夫ほんぶの三毒の煩惱ぼんノウを轉變てんぺんしてくださると承うけたまはつております。三毒の煩惱ぼんノウといふは貪欲こんよくと瞋恚しんにと愚痴ぐちでありまして、これが惡の根本こんぽんとなされてあります。そこで清淨光しやうじやうくわうを放はなつて貪欲こんよくをきよめ、歡喜光くわんぎくわうを放はなつて瞋恚しんにを和らげ、智慧光ちゐけいを放はなつて愚痴ぐちを破やぶりたまふといふことであります。凡夫ほんぶはこの聖なる御光おひかりに觸ふれて、身みも心こころも柔順じゆうじゆんになるとたゞへられたのはこの妙趣みやうしゆであります。

### 圓融至徳の轉化

これについて、こんな傳話でんわをきいたことがあります。これは有名なある御講師の逸事いしであつたかと記憶おぼしております。この御講師おんこうしは學寮がくれうの首班しゅばんを占しめられた學匠がくしやうでありました。單たんに學者がくしやといふだけでなくて信念しんねんのふかいお方おなたでありました。

ある秋のこと、ふるさとの越前えちぜんから久しくその教化きやうくわを蒙かうつた同行どうぎやうがたづねてまゐりました。御講師おんこうしは無邪氣むじやきなお方おなたでありました。

この頃、國元くにもとには柿かきが熟じやくしてゐるだらうな、土産みやげに持つてきてくれたかな。同行どうぎやうは困こまりました。突如とつじよとして上落じやうらくしたので國産くにさんの柿かきの土産みやげを忘わすれてきました。まことにすみません、このたびは取急とりいそぎまして土産みやげといふものは何ひとつ持つ

てまわりませんでした、すみませぬ。  
すると御講師はすかさず仰せられた。

何ひとつもたぬとな、いつはりをいはつしやるな、こちらから土産を注文しやう。久遠劫来つくりとつくつた罪業はたんと背負うてござらう、それを土産において行かうしやれ。

慈訓まことに切々たるものであります。意外な叱言におどろいた同行は、みるみるその深い慈訓に首を垂れて、感激しつゝ言上しました。

御講師様ありがたうございます。しかし御講師様あなたさまは手おくれでございました。その罪業はのこらず阿彌陀如來がひきうけてくださいました。道がに教養の行届いた同行である。御講師は莞爾として微笑されました。そしてかさねて仰せられました。

それでは、日夜におこる煩悩を土産において行かつしやれ  
追窮極めて急なるものがありました。道の同行もこれには行つまつた。そして悲鳴をあげて、あやまりました。

御講師様、むごいことを仰らずに、これだけはお許しください、この日夜におこる煩悩をさしあげましたらお慈悲よろこぶたねがなくなります。

この一問一答、さすがに眼ざめきつた人々の言葉であります。悪を轉じて善を成す圓融至徳のお念佛をよろこぶものゝ心境が、素直にかざらずに現はれてゐるやうな感じもいたします。

### 免疫力と轉化力

毒をすて薬をとることによつて、健やかな生活をなすことができるのでありま

す。しかし毒を喰はねば生きられないこともある複雑な地上におきましては、毒を喰つても斃れないだけの強い免疫性を構成しておく必要があります。さらに喰つた毒を變じて薬となすだけの轉化力をもそなへておく必要があります。こゝに始めて、完全な健やかさといふものを保持し成就することができるのであります。宗教の妙味は人間にこの免疫性をあたへ、轉化力をあたへることにあると云つてもよいとおもひます。

それでありますから眞實の救ひをもとめるには、よろしくこの聖法輪に歸入して宗教を信じなくてはならないのであります。従つて、人間の本格的な生き方として、若くは圓かな生き方として、この聖法輪の生活を成就しなくてはなりません。ぬ。

上來のべてまゐりました三重の生活輪におきまして、本能輪の福も、理性輪

の善も、とうていすべての人間が同一につくり出すことはできません。また、これの完全を期待することもできません。けれども、この聖法輪は萬人のうへに直ちに完全されるのであります。蓋し、聖法輪の生活は人間の加工でなくて聖法の廻施であるからであります。聖法輪は全くめぐまれたる生活であります。

### 創造と領納

聖法の廻施といふこと、聖法輪はめぐみであるといふことを申しましたが、これについて注意すべきことがあります。

人生々活の價値、即ち、生活財のうちには人間の力で加工し創造しなくてはならないものと聖なる力によつて與へられ廻施せらるゝものとのに分別されます。即ち自然價値の充足である「福」と理性價値の實現である「善」とは、人間の能力によ

つて加工し累積しなくてはならないのであります。即ち、相対価値はその人間の能力に應じて創造されるものであるからであります。

けれども、絶対価値である「聖」なる法はあたへらるゝものであり、廻施せられるものでありますから、われらはこれを領納し信受するだけであります。

即ち相対価値は創造すべきものであり、絶対価値は領納すべきものであります。然るにこの識別を忘れて、人間の手で創造すべきものを、神佛から領受せんとするところに迷信の錯誤が生じ、また、はからひをすて、領納すべき聖法を、凡小の手細工でつくり出さうとするから、人生は行つまるのであります。故に創造すべきものを創造すること、領納すべきものを領納する識別をあやまつてはなりません。

尙ほ、人生における生活財の缺乏、人生々活の缺乏と貧窮は相対財の創造に懈

怠であるといふことだけに因由するのではなくて、絶対財の領納を閑却してゐることに、もつと大きなつまづきのあることを明敏に気づかなくはなりません。

### 聖法の廻施

そして、この聖法の廻施といふことについて、最も周到にして純真なる大道をうちひらき、宗教の眞實を開闢せられましたのは、親鸞聖人でありました。即ち他力攝生の旨趣をつまびらかにして、すべての人々がのこらず救はれて行く大道として浄土眞宗を開示せられたのであります。

これについては、第二講においてくわしく申上げることいたします。

## 第二講 如何なる宗教を信すべき乎

### 宗教の批判的復興

第一講において「何故に宗教を信すべき乎」について述べましたから、こゝには進んで「如何なる宗教を信すべき乎」といふことについて、すこしばかり述べることいたします。

今日わが國におきまして、宗教と稱するものが數おほく散在してあります。宗教として認容せられてあるもの、若くは宗教に類似してあるものも澤山あります。これらの宗教のうち、何れの宗教を信したら善いのであらうかといふことは、眼前に横はつてゐる重大な問題のひとつであります。

ちか頃、宗教の復興といふことが、喧しく論ぜられて、社會の視聽をひくことになりました。

宗教の復興といふことはうれしいことでもあります。とりわけて日夕、宗教の弘通を念じてゐる私たちにとつては何よりもうれしい現象であります。かゝる機會において、あらゆる機縁をとほして大法を興隆しなくてはならないとおもひます。わが本願寺においても、この秋、「興法利生」の標目をかゝげて、一派を動かされたことは適切なことでもあります。

宗教復興はひとり宗教そのものゝために喜ぶべきだけでなくて、國家と社會にとつても實によるこぶべきことであります。ところが、この宗教復興といふ機運に乗じて、さまざま、宗教めいた色彩を粧うた運動が新しく頭を擡げてまゐりました。これらの新興の宗教運動のなかには、人間の弱點と社會の缺陷とにつけ込

んで、色々の迷信を鼓吹するものが現はれて、それが相當に流行するやうな傾向を帯びて参りました。

かゝる情勢を鑑察するとき、私はいよく「如何なる宗教を信すべき乎」について、嚴正な批判を加へる必要があることを痛感するのであります。

漠然たる宗教復興では物足りないのであります、否な物足りないといふだけでなくて、極めて危いことに氣づかなくてはならないのであります。宗教の假面を冠つたいろくの運動や、不純な迷妄の紛れこんださまざまの運動は人生を荒蕪せしめ、人間をきづゝけるだけであります。似て非なる宗教を信するものが多數にできましても、それはすこしも喜ぶべきではないのであります。少數でもいゝから、眞實の宗教を深信するものゝできるやうに心がけなくてはなりません。

如何なる宗教を信すべき乎、一言にしてこれに明答すれば、眞實の宗教を信じ

なくてはなりません。そして、眞實ならざる宗教を信じないやうに指示しなくてはならぬ。こゝに明徹にして力強い批判が見えてゐなくてはなりません。かさねて私は切言します、漠然たる宗教の復興を煽動することではなくて、嚴正なる批判的復興の鴻業に力をいたさねばならないのであります。

### ふたつの抗議

ところが、今の世の識者たちの内には、かゝる主張を偏狭な排他性を有つもの如く、あるひは窮屈な拘束力を加ふるもの如く、誤解して、宗教の復興を妨げることになりはしないかと杞憂される方々もありません。そして、少くともこゝにふたつの抗議があらはれて來てゐるやうに想像せられるのであります。

第一の抗議といふのはすべての宗教は同一なところに結歸するのであつて、これに甲是乙非の取捨と廢立を加へることは不當でないかといふのであります。

第二の抗議といふのは、宗教の信心のうちには正邪があるかも知れぬ。しかし始めから正信の道に入ることとは困難なことであるから、最初は迷信でもよいからそれを興へておいて徐ろに正しい信仰へみちびき入れることが親切でないか、始めから迷信を斥けてかゝつたら、宗教を信するものが少くなるであらう。迷信とひとくちに斥けるけれども、この迷信のなかにも宗教としての大切な素質が存在するでないかといふのであります。

抗議はこれに盡きる次第ではありませんが、これらはかなり有力なものであります。そして、これらの抗議は相當に教養のふかい社會の識者のうちに周遍せる考方のやうにも見てとれるのであります。



仍つて、これらの抗議を手がかりとして、私の講述をつづけることが、具體的であらうとおもひますから、先づこの抗議に對して、いさゝか辯明することにしたしませう。

### 同一に結歸しない

先づ第一の抗議について申述べます。すべての宗教は同一であるといふことは昔しからも、繰返されてきたところであります。「わけのぼるふもとの道はことなれど同じ高嶺の月を見るかな」といふ古歌がしばしばこれらの宗教同一論者によつて引用されたところであります。宗派はいろいろに分かれても、最後には同じところへ落ちつくのであるといふ意味であります。故に、すべての宗派は同一である。従つて、宗派の甲乙を取捨することは宗教を取扱ふにふさはしいもので

ない。すべての宗教はみんな同じ眞理をいひあらはしてゐるのであるから、何れなりとも有縁の宗教を信じたらよいのである。如何なる宗教を信ずべき乎などいふことは無用にして有害な詮議沙汰であるといふ意になるわけであります。すべての路は羅馬に通ずといふ、この意味においてすべての宗教はその終局は同一の眞理に結歸するといふことは、ある意味において私も一往肯認しないでもありませぬ。けれども、それには正しい批判的な配列を容れなくてはならない、また嚴密な廢立と淘汰を要するのであります。だから、嚴密にいへばすべての宗教は同一の終局に歸入するといふことは出来ないことになるのであります。

### 宗教批判の根柢

そこで、こゝには漠然として宗教といふものを考へずに、少くとも「教」と「法」

とをふりわけてみるのが、考察の上に便利でありませう。

「法」すなはち宗教的真理は同一であります。真理にふたつはありませぬ。ふたつあるものは真理といふことができないのであります。それでありませうから、真理が同一である。大法は唯一無二の實在であるといふことは云へるのであります。これが直ちにすべての宗教が同一であると轉訛したものでありませう。けれども、こゝに大變な錯誤があるのであります。「法」は同一でありますが、「教」は同一なものではないのであります。

「教」とは「法」を詮表したものであります。「法」をして人生々活の指導原則として組立てたものが教であります。ところが、「法」をとつて「教」として表詮するときには如實の表詮と如實ならざる表詮とがあります。そこで「教」には眞實なものと、また、眞實ならざるものが分別されてくるのであります。

そこで、「法」は素直に信受すべきものであります。ところが、「教」は嚴格に批判しなくてはならないのであります。こゝに宗教に對する批判の必要が生じるのであります。

### 眞實と權假と邪偽

この宗教の批判について、その典範をお示しになつたのは「見眞の聖」であらせられました親鸞聖人であります。聖人は一生をとほして眞實を見とゞけられたのであります。が、「教」について眞實と權假と邪偽との三つを識別なされました。眞實の教といふのは「法」の全貌を如實に表詮したものでありまして、「教」と「法」とが全く一致してゐるものを指すのであります。それであるから、危ぶみなしにすべてを信受し依憑しきつてよい教であります。

次に權假ごんげの教といふのは、「法」の一部が詮表されてゐるのでありまして、未だ完全に調そこのうてゐないものであります。しかし、ある階段かいでんにおいてはそれ相應さうおうな價値ちもあるけれども、最後まで把持はじし依憑えへうすることのできないもので、何時かはすてなくてはならない教であります。

終じゆうに、邪偽じやぎの教といふのは、全く「法」を見失つてしまつたものであります。

「法」と背反はいはんし、「法」を歪曲わいきよくしたものであります。しかも、それに「法」の假面かめんを被からせてゐるのであります。これは全く法を欺あざむき、人を惑まどはしむるものであります。最初から指を染そめてはならないものであります。故に、これは「教」と名づくべきではないのであります。しかも「教」の名を粧まふて居るから、かりに邪偽じやぎの教といふ分別ぶんべつをなされたわけであります。

さて、これだけのことを理解りかいしていただければふたつの抗議こうぎもをのづから解消かいせうさ

れることゝ思ひます。

第一に、宗教には眞假しんげがあり眞偽しんぎがあるとすれば、假げを踏ふみ超こえ偽ぎを斥しりぞけて、専志せんしして眞實しんじつの宗教を求めなくてはならぬことはいふまでもありますまい。そして、宗教は人生々活こんたいの根蒂こんたいとして缺かくべからざるものであることに氣づけば氣づくほど、宗教に對する批判ひはんを嚴格げんかくに徹底てつていせしめて、眞實しんじつの宗教を顯彰けんせうすることがまったた社會けうかうの共同工作きうどうさくでなくてはならないと思ふのであります。

第二に迷信めいしんにもよいところがあるとか、若くは迷信をもつて誘さそふことも時にとつての工夫くふうであるといふことも、親切しんせつのやうでありまして實は危あぶないことでもあります。迷信めいしんと申しましてもそのうちには少量せうりやうの眞實しんじつをふくむといふ實際じつじは拒こむことはできません。眞まと假げと偽ぎとは抽象ちゆうせう的な分別ぶんべつでありまして、實際じつじにおいてはこれらいろいろの分量ぶんりやうでとりまぜられてあることを注意ちゆういしなくてはなりません。そ

ここで批判はいよ／＼綿密に徹底しなくてはなりません。迷信を本義とする邪宗門が社会に存在する技巧として、一分の眞をとりこんだり假想することは、ありがちであります。そこに却つて批判を要する理由があるわけであります。迷信を以つて誘ふといふことは警策すべきことであります。權假の宗教は誘引すべきではありませんが、邪偽の迷信は棄捨すべきであります。何となれば、權假のものは眞實に發展して行く階段でありますけれども、邪偽のものは眞實を見失ふ陥穽にすぎないのであります。だから迷信を許すことは誘引の可能はないのであつて、これを否定することによつて、眞實へのみちが啓かれてくる次第であります。

これによつて、宗教の復興は批判的でなくてはならないのであります。眞實と權假を分別し、眞實と邪偽を勘決して、權假をはらひすて、邪偽をとりのけることによつて、いよ／＼眞實の宗教を開顯しなくてはならないのであります。

### 批判を試みる機構

さて、かゝる宗教の批判を試みることは事實の上において容易ではありませぬ。わが國の現状においては宗教のことはすべて宗派に一任してあるのであります。なるほど宗派でなくては宗教の宣布はできないわけでありまして、これは適當なことであります。けれどもすべての宗派はその信ずるところを唯一の眞實として宣布する性能を有つてゐるのでありますから、宗教そのもの、眞假を識別し眞偽を勘決して行くだけの批判と取捨をなす機能としては適切なものではありません。こゝにおいてか國民教養の上にこの宗教といふ一般の概念を正しく理解せしむるだけの用意がなくてはならないとおもふのであります。

つまり、宗教のことは宗派でなくてはやれないことゝ、宗派ではなしとげられ

ないことゝがあるのです。そこで、宗教に對する國民の教養をなし、國民に對して、正しい宗教を批判し選擇して行けるだけの素質と能力を賦與することが國民を親切に教養するうへにおいて、缺くべからざるものであると考へられます。

この點において、近時學校教育のうちに宗教科を創設するといふ識者の意見があらはれてきたことに、深い關心をもち、ひとへに隨喜の念をもつものであります。國民の教養には正しい道徳を教ふると共に、正しい政治と正しい宗教を正しく教ふることが最も緊要であると存じます。正しい政治、正しい道徳、正しい宗教を培ふことによつて、全人格的な三輪具足の生き方が成就されるのであります。

### 邪偽の宗教と迷信

さて、宗教の眞實といひ、權假といひ、邪偽といふ、これを具體的にしらべて

みるとどうなるのでありませうか。若し、上來、のべてまいりました三重の生活輪にあてはめてみますと、第一重の本能輪におけるものは「邪偽」の宗教であり、第二重の理性輪におけるものは「權假」の宗教であり、第三重の聖法輪におけるものが「眞實」の宗教であります。

まづ、邪偽の宗教とまうしますのは、本能輪における自然價値をある不自然な魔力によつて轉換しやうとするものであります。即ち、吉凶禍福を人間の欲するやうに魔術によつておきかへやうとするのであります。これらは人間の智識がひらけない時代において存在したものであります。これは全く邪偽であります。自然の價値は自然の法則によつてのみ左右されるのでありまして、この自然法に背反せるところの非法によつて左右せらるべきものではありません。

病氣の全快するやうに神に祈願をこめたり、金の儲かるやうに神にすがること

きは、全くこの部類に属するものであります。ひろく云つて現世の利福を神佛に祈禱するものはすべてこの部類に属するものであります。

ところが、かゝることが迷信であることは、現代の科學的常識をもつものは、誰れでも直ぐに氣づく筈なのであります。生活の困難に當面したり、利慾の打算に惑ふたりすると、つい、この迷信にひつかゝるのであります。溺れたものは藁をつかむと申しますが、迷信は全く溺れたものゝ擱んだ藁でありませう。溺れて藁をつかんでゐるものから藁をうばふことは苛酷なことのやうにも見えますがしかし、藁をつかみながらも溺れてゆくことを見とゞけて、たしかにたすかる救命囊を與へることが大切であります。

然るに、この迷信ほど現代に幅を利かしてゐるものはありませぬ。邪偽の宗教がこれをかゞげることが云ふまでもなく、權假の宗教もこれをかゞげて俗衆をあ

つめ、剩へ眞實の宗教と稱せらるゝものさへ、社會によびかけるときはかゝる迷信をかかげてゐるのであります。そこでいよく迷信の分野がひろくなる次第であります。これは全く困つたことであります。

### 宗教の現實的効驗

さらに困つたことは、かゝる現世の利福を與へる宗教こそ、現實に効驗あるものとして是認せられそうになつてきた現時の價值轉倒のありさまであります。

こゝにおいてか、宗教の現實的効驗といふことについて、落ついた考察をしておく必要があるのであります。

宗教の効驗は人間の全體を救ふものでなくてはなりません。これを時間的に云へば生も死も救ふものでなくてはなりません。従つて未來の死を救ふと共に現實

の生をも救ふものであらねばなりません。そして、その現實に於ける効驗は如何なるものかといふと、自然價値を與へることではないのであります。あらゆる吉凶禍福をよこにたちきつて正しく生かす力を賦與するところに宗教があるのであります。これ宗教において信心と行業を説くわけがらであるのであります。

自然の價値は神佛の力によつて左右されるものでなくて、自然の則によつて轉換されるものであります。さらに、かりに自然の價値を轉換したからとて、人間は救はれる存在ではないことを知悉しなくてはなりません。

試みに富を與へたら人間は救はれるでせうか、検討を要しませう。なるほど貧しいものは貧しさに苦んでゐます。このときは金が欲しいのであります。だから、これに金を與へましたら救はれます。ところが金を有つことによつて貧しさの苦しみからは救はれますが、こゝにまた富めるものゝ悩みがまたあらはれてくるわ

けであります。してみると、人間は金がなくても苦しみ、金があつても悩むやうにできてゐるのです。貧乏人も泣いてゐるし、金持も泣くわけであります。こゝで考へなくてはならないことは、金は貧しさを救ふことはできても、人間を救ふことができないのであります。

こゝになりますと、宗教は人間そのものを救ふ力として信心の活力を與ふることが意味ふかく氣づかれるのであります。即ち、貧しくてもいやしくならず、富んでもおごりもせず、正しく生き抜く力を與ふことが人生を救ふ正しい道であります。金があつてもよろこぶことができ、金がなくてもよろこぶことのできる信心の與へられたことは尊いことでもあります。

そこで、宗教を信じたからとて、米一合降つて來ないのであります。けれども乏しい生活のなかに粥をいたゞいてゐても、千石持よりも心のゆたかな楽しい生

活をすることのできるのが宗教であります。こゝに宗教の與ふる現實的な効驗が力づくよくあらはれて居るのであります。

もとく、宗教は人間の生きるための素材を與ふるものではなくて、あらゆる素材のうちにも正しくうつしく生き抜ける力、すなはち生命を與ふるものであります。これらの消息を味うて、あやしい迷信などに惑はず、正しい宗教によつて無碍の生活を啓拓しなくてはなりません。

### 權假の宗教と低滞

次に、權假の宗教といふのは、人間の知能と行爲にたよつて、自己を救はんとする宗教でありまして、理性輪に於ける宗教の一階段である。合理的な宗教であり、道徳的な宗教であります。

この理性輪に於ける宗教は本能輪に於ける迷信を取りのけてくれる點において相當の値打をもつものであります。けれども、聖法輪の正信を遮蔽するやうなことがあつては人間を蹉跌せしむるものであります。たゞ聖法輪の信心に到達する階程として反省されるときにのみ、人生を發展せしむる工作として値打を見とめられるわけであります。

人間の知恵と徳行、それは云ふまでもなく値打はあるものです。けれども、この知恵も徳行も不充分なものでありまして、これだけで人生を解決することには不足があり、況んや法界に逍遙するには不足があるのであります。それをいかにも完全なものゝやうに誤認するときは、やがて思ひがけない行つまりに突當るのであります。

たとへば、金は大切なものであります、金がなくては人生は一日もくらしえない



のであります。けれども、金で始末のできないことも人生には横はつてゐるのであります。故に、金をつかんだらそれで人生は乗りきれれると思ひあがつてはならないのであります。學問も道徳も、さながらこれと同じことでもあります。つまり、相對價値を絶對價値のやうに見あやまつてはならないのであります。然るに、やゝもすると、人間の學問で法界を達觀し得るものゝやうにほこり、人間の道徳で人生を處理し得るものゝやうに誤解してゐるものがたくさんあります。これ權假の小路にとゞこほつて眞實の大道を濶歩することのできない障得となるわけであります。

ところが、多くの場合にこの權假の宗教が最も健全な宗教のやうに自任し、若くは信賴されてゐるのであります。現代においても、倫理的にして合理的であるといふことが宗教を評價する唯一の尺度となつてゐるかのやうであります。

見 見 と 禿 愚

けれども、人間は謙虛に眼をひらかなくはなりません。帽子と靴とのあひだに生きてゐることだけを知つて、天と地とのあひだに生かされてあることを忘れてはなりません。人間は最高の尺度であるなど、驕つてゐることは、まことに危いことでもあります。しづかに法界に跪いて、すなほに人間のありのまゝを認知しなくてはなりません。そして、地上の知識と凡小の徳行は不完全なものであることを省察し、これにたよつて最後の救ひをもとめることの、危いことを知らねばなりません。

淨土教の聖者たちはこの地上の人間をまともに諦觀せられた點において、まことに眼ざめた方でありました。とりわけ、わが親鸞聖人はめざめきつた聖者

であらせられました。みづから「愚禿」と名告あらせられましたが、これはおごり  
 ぞかな人間批判ともいふべきものであります。「愚禿」といふは「愚」と「悪」との存  
 在であるといふほどのことでもあります。そして、この「愚」といふのは知識が足り  
 ない人といふ意味ではなくて、人間の知識そのものゝ愚かさを意味したものであ  
 ります。また「悪」といふのは、善根の足りない人といふ意味でなくて、人間の善  
 根そのものゝ悪といふほどの意味であります。こうして、人間そのものゝ「愚」  
 と「悪」とを認知するところが、そのまゝ聖法の「賢」と「善」とを仰信せられること  
 になつたのであります。人間の相対的な凡小が信知せられて、如來の絶對的な威  
 力が信知せられた次第であります。こゝに「愚禿」の聖者が、そのまゝ「見眞」の  
 聖者としてたゞへられる所以があるのであります。

蠟燭の灯では月は發見されませぬ、月の光によつて始めて月を見ることができ

るのであります。蠟燭の灯を人智にたとへたら、月光の明は佛智にたとふべきで  
 あります。

濁江は百年たつても清淨になりませぬ。月の光をうけて始めて鏡のやうに淨化  
 されるのであります。濁江を探る工作は道德にたとふべく、濁江の月は宗教にた  
 とふべきであります。

人間の智目と行足とによつても、人生はある程度の向上と發達は期待し得るこ  
 とは云ふまでもありません。また、これによつて、一步なりとも人生を切りひら  
 かなくはなりません。但、人間そのものを救ふことは覺束ないことを省察して、  
 もつと大きな力、聖なる力をうけ入れるだけの用意がなくてはなりません。

### 眞實の宗教の開顯

眞實の宗敎は聖法輪に歸入することであり、即ち聖法を純全に領納し、素直に聖法に隨順し、如實に聖法を履踐することであり、人生は聖法に統べられて、力づく救はれて行くのであります。

この聖なる法は全く法爾として人生に展開するものであつて、凡小自力のほかに、親鸞聖人によつて開闡せられた眞實の宗敎の風光でありました。そしてこれは凡夫の手垢をつけずに、法界のいのちを獲得する大乘佛敎の至極であります。

そして、この親鸞聖人によつて開顯せられた淨土眞宗の本質は他力の救ひといふことでもあります。この他力の救ひといふことによつて、はじめて無碍の聖化が行はれたのであります。

他力の救ひといふことは、聖なる如來力の顯はれであります。他力とはいふま

でもなく、聖なる如來の力であります。法界はこれを靜的にのみ諦觀すべきものでなくて、そのまゝ動的にも仰信すべきものであります。この聖法の動きたまふありさまを感佩せられたところに、親鸞聖人の尊い慧眼がひらめいてゐるのであります。

一如法界はそのまゝ如來として顯現したまふのであります。因果を超え名字を越えた一如法界がそのまゝ因果と名字のうちに顯現して、法藏菩薩の本願となり阿彌陀佛の光明となりたまふのであります。この因願と果力がそのまゝ南無阿彌陀佛の名號となりて、われらに廻施せられ、如來の光明がわれらを攝取したまふのであります。

それであり、他力の救ひといふことはこれをくわしく申しますと、名號の廻施と光明の攝取によつて、如來がわれらを救ひたまふのであります。即

ち、名號はわれらの内なる信心として廻施せられ、信心は流出して念佛となつてくださるのであります。また、光明は外から罪ふかきわれらを攝護したまふのであります。かくて、名號の廻施をいたゞくことによつて聖なる徳がわれらを救ふ力となり、光明にまもられることによつてわれらのあさましい罪業が轉化されて行くのであります。

たとへて申しますと、母が子供を生かすときに乳と手とを以つていたします。乳は子供の内にあらはれて生かす糧となり、あたゝかい手は子供を外からまもることによつて子供がつかないことになるのであります。若しこの母の乳を名號の廻施にたとへることができらば、母の手は光明の攝取にたとへることができるのであります。何等の能力もないみどり兒が、母親の切々たる念力によりこの乳をあたへられ、その手に擁せられてうつくしく生き伸びて行きますとおな

じやうに、何等の能力もないわれら凡夫が、たゞ阿彌陀佛の願力によつて救はれるのであります。即ち、名號を信受し、光明にうちまかせて、そのまゝ聖化の生活に歸入して行くことであります。まことにありがたいことであります。

### 自力更生と他力更生

ところが、近頃の世上には「自力更生」といふ標語がさかに行はれまして、やゝもすれば「他力本願では駄目である」と稱せられることは、世人をまどわすやうにおもはれます。自力更生といふことをいふ人々のこゝろ持はよくわかりません。これは國民の獨立をすゝめるものであります。けれども、その標語として、宗教上の専門語を不用意に依用せられたゝめに、國民の宗教心をあやまるおそれがないとも云へないのであります。

「自力」といふことは「我執」とか「我慢」とかいふことを意味するものであります。殊に純正な宗教心を示す浄土教においては然りでありまして、寧ろ、斥けなくてはならぬつまづきとせられてあるのであります。これはひとり宗教だけではありませぬ。私心をすて、公道につくといふ生活にはかゝる我執や我慢をあやまりはて、行く心持が大切なのであります。此の意味においては自力更生といふことよりも他力更生といふことが、寧ろ、趣ふかいことであります。他力更生といふことは聖力更生であり、佛力更生でありますから、決して、人間を卑屈にするものでありませぬ。

他力本願といふことをきらふ人々は、他力といふことを誤解して人間を卑屈にするやうにおもひ、人間の独立性をきづけるやうに心配されるのであります。これは全く杞憂にすぎません。人間が太陽の光をうけて生きたとて、みどり兒が

母の乳をのんで生かされたからとて、その独立性をきづけるものでありませぬ。否な、独立性そのものが大きな力のめぐみであることを感謝して行くところに、深い叡智があるのであります。

われらはたゞ煩惱の本能によつて動かずに聖なる力をうけ入れて生きることはありがたいことであります。われらはたゞ凡小の解行によつて制限されずに、尊い信心と行持をいたゞいて生かされることは力づよいことであります。

人間が人間としてほろびて行くことでなく、人間が佛と成つて行く必然を體得して行くことは、實に人生の最高のよろこびでなくてはなりません。さ迷へる人間としての流轉をくりかへすのでなくて、迷を轉じ悟をひらくことが、人間に生れた何よりの一大事であります。そこで、「自力更生」といふ時代の標語に對して私はその當時から「他力更生」のことを提唱してゐる次第であります。

### 第三講 如何にして宗教を信すべき乎

#### 篤く三寶を敬へ

第一講において「何故に」宗教を信すべき乎をのべました、第二に「如何なる宗教を」信すべきかをのべました。仍つて、最後に「如何にして宗教を信すべき乎」について講述することにいたします。

宗教の生活とは上來のべてきましたとほり聖法輪に歸入することであり、この聖化こそ宗教の信心であります。そして、この聖化のみちとして聖なるものへの親しみをふかめ、敬ひをもつことが最も有効な方法であり、好適な方法であります。そして「聖」は佛教におきましては、佛法僧の三寶として表はれて居ります。

す。和國の教主であらせられた聖徳太子が十七憲法のうちに、「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり」と仰せられたことは、正しく聖化へのみちをおさとしくたされたものと感戴しなくてはなりません。

### お内佛の安置

まづ、佛に親しむにはいかにすればよいのでありませうか、私たちは何時も佛に背をむけて淺ましいものに誘はれて惑ふて居るのであります。そこで、せいなく佛に親しむやうにたしなみたいものであります。

これについて、趣ふかく感じ、また、ありがたく感じられるのは佛敎の家庭にお内佛即ち佛壇が安置されてあることであります。この佛壇が安置されてあることは、私たちが意識してゐるよりも、もつと深く私たちの生活に聖いものを與へ

てゐるやうにおもうのであります。

わが國においては、天武天皇十三年三月、詔をたまうて家毎に佛壇をかまへ、佛像と佛經とを安じて、朝な夕な禮敬をなすことを示されました、これがお内佛の起源でありまして、まことにありがたいことであります。

お内佛は私たちの家庭における「聖い窓」であります。この「聖い窓」の扉をひらくと「聖い光」がおのづから家庭にながれこんでくださるのであります。「聖い光」に觸れてこそ「聖い生命」が芽生えて行くのであります。

お内佛のない家は、どんな立派に裝飾されてありましても、しんみりとしたうらほひがありません。うつくしい光彩がありません。窓のない家はまつくらであります。生命はそだちませぬ。お内佛を安置してある家は、どんなにちいさな家でもなつかしい感じがいたします。こんなにおもうときお内佛を安置して來た尊

い傳統でんごうをすなほに感謝かんしゃしてうけとらなくてはなりません。なつかしい傳統でんごうをうつくしくみがいてゆきたいものがあります。

そして、朝な夕なお内佛うちぶつに給仕きゅうじすることは、佛ぶつに親したしむころを最も自然しぜんに培つちかふ途みちであると感じられます。私たちの生活はだん／＼忙せはしくなつて行きます。ゆゑに特別な宗教的行事しやうきよくじを試こころみることはよほど困難こんなんであります。そこで、わづかな時間でそんなに手数をかけなくても、すこしばかりの心がけひとつで行はれるやうな宗教的教養しやうきようが大切であります。また、立派りつぱに念ねんの入つた宗教行事しやうきよくじを稀まれに行ふことよりも、平常の生活のうちに絶えず行ふてゆくことが効果かうかが多いのであります。これらの點をかんがへてみますと、家庭のお内佛うちぶつに親したしんで行くことが、平凡な私たちが生命を培つちかふには極めてふさはしいことであるやうにおもはれます。

### 先德せんとくの遺訓いこん

これについて尊い先德せんとくが道俗どうぞくの時衆ときしゆうに教示きやうじあらせられた偈文げもんはまことに適切てきせつなものであり、ねんごろなものであり、また趣味しゆみふかいものでありますから、こゝに抄録せうろくさせていただきます。

- 木畫尊像拜之如眞
- 一念往生信之如實
- 報恩稱名寤寐勿忘
- 謝德勤行晨昏勿廢
- 三時飲食家屬共用
- 一時佛飯豈疎懶哉



我座常佛何況佛室  
我衣時裁裁況佛帳  
香須清淨燈須明明  
勿使花枯勿使器穢  
更重師教且從世教  
莫妨家職深思量之

生ける眞佛を拜め

「木畫の尊像これを拜する眞の如くせよ」といふのは、お内佛の御本尊を偶像のやうにおもつてはならないと、いましめられたのであります。木像の本尊、畫像の御本尊、それはかぎりなき生命と、かぎりなき光明をまどかに具へたまふ南無

阿彌陀佛の生けるお姿であります。故に、お内佛の御本尊は生きてゐらつしやる生きた眞佛のお姿であらせられます。

佛身を拜むものは佛心に觸れます、佛像は佛身の活きた表現であらせられます。死せる偶像ではありませぬ、「これを拜する眞の如くせよ」と示されてあります。とほり、活ける佛をそのまゝ活ける佛として拜めといふのであります。

信心はめざめきつた智慧であります。活ける佛の現前をみとゞけることでもあります。活ける佛を死せる木像のやうにおもつのは、私達の目が腐つてゐるからであります。私たちの生命が硬化してゐるからであります。ひとたび、智慧の信眼をひらけば、活きた佛をありのまゝに活きた佛として拜むことができるのであります。

そして、このお内佛の御本尊の活けるおん姿を仰信することゝろひとつきへあれ

ば、すべてはうつくしく調うて行くのであります。すべてはおのづから生かされて行くのであります。御内佛の御本尊が生きてゐられる。そしてわれらの生活をいつもながめてゐらせられるといふことがはつきり信ぜられるなら、われらはこのほとけを無視しては生きられなくなるのであります。そして、自然に佛にみまひかれて生きることになれるのであります。

「一念往生これを信ずる實の如くせよ」とは、お内佛の御本尊は私を救ひたまふお姿であるとのめよとの仰せであります。

「一念」とは信心のことであります。「往生」とは浄土に生れることでもあります。信ずるひとつでお浄土に生れさしていたゞく、信ずるひとつで完全に救はれるといふ道味を「一念往生」といふのであります。そしてその「一念往生」といふことは、御本尊の活けるお姿であります。御本尊は南無阿彌陀佛であります。

南無阿彌陀佛といふは「まかせよ、すくふ」といふことであります。「まかせよ」は一念の信念であり、「すくふ」の究竟は往生であります。そこで御本尊はわれらを救ひたまふお姿であります。

たゞ、漠然と佛は尊いとおがむのではたよがりありません。このさまよへる私を救ふてくださる生命であり光であり力であることを如實に仰信するとき、おのづから佛が親しまれるのであります。佛の力が私の救はるゝ信念となつてくださるのであります。南無阿彌陀佛の御本尊を仰いで、わが往生を成就してくだされたお姿であるといふことを信じて、おのづから佛が親しくなれるのであります。

### 眞佛弟子の生活

すべては他力で救はれるのであります。名號の廻向を全領し光明の攝取におま

かせして救はれるのであります。めぐみに生きる者の法喜はたゞ感謝と報恩であります。「報恩の稱名寤寐に忘るゝこと勿れ、謝徳の勤行晨昏に廢すること勿れ」むつかしい行業をなさねばならないといふのではありませぬ。たゞ縁にふれ事につけ、ねてもさめても念佛を申して御恩をよろこべ、朝な夕なお内佛にひざまづいて、恩徳を感謝せよとおさとしてあります。

報恩謝徳の生活、ほとけの恩徳を報謝して日ぐらしをさせていたゞくといふことはめぐみに生かされる眞佛弟子の生活としてもつとも純なものであります。

やゝもすると報謝といふことのあぢはひを誤ることがあります。即ち報謝せらるゝものに何ものかを加へ、報謝するものが何ものかを失ふやうに感ずることがありますが、決してさやうなことがないのであります。報謝せらるゝものゝよろこびは云ふまでもありませんが、報謝するものゝ生活こそかぎりなく充たされて

豊かになるのであります。

感謝のこゝろはすべてを生かすのであります。すべてのめぐみをめぐみのまゝにうけ入れて生きる姿であります。名號が信心となつて智慧のまなこをひらき、信心が稱名となつて報恩の行業を成就してくださるといふことはありがたいこととであります。「ありがたうございます」と感謝するこゝろもちこそ尊いめぐみそのものであります、この感謝のこゝろひとつをめぐまれて生きるものはありがたい無碍の生活者であります。「報謝の稱名」はうつくしい生活の力素であり、「謝徳の勤行は生命の培養であります。

聖胎に養はるゝたしなみ

生けるほとけにかしづき、活けるほとけに生かされてゆく生活は、そのまゝほ

とけと共に起き、ほとけと共に臥すといふ聖胎に養はるゝ生活がめぐまれるのであります。

そして、聖胎長養の生活にこそ、いよくたしなみが大切であります、日常生活のすべての機縁において佛を慕ふことが大切であります。そこで、こゝには衣食住の三つのうへに佛を忘れないことをさとされました。

まづ食事について「三時の飲食家屬共に用ゆ、一時の佛飯豈疎懶なるべけん乎」とさとされました。どんな人でも三度の食事は缺かさずにしたゞくのである。それに朝一度さしあげるお佛飯を忘れることは淋しいことでないかとの仰せであります。また家屬のものがみんなひとつの食卓をかこんで御飯をいたゞくのにお佛のほとけを除けものにしておくことはあさましいことでないかとの仰せであります。

お内佛に佛飯を供養するのは、居候に喰はすやうにかんがへてはなりません。ほとけは最上の福田であらせられます、われらの功德はほとけの手にうけとられて始めてうつくしい芽をふき果を結ぶのであります。われらの手にあつては善根もけがされます、それがほとけのみ手にうけとられて始めて淨財としてきよめられるのであります。そこでほとけに供養することはそのまゝ尊い生命の糧をめぐまれることでもあります。

また、こゝに佛との親しみを感じるのであります、佛は「作ニ受施」と仰せられてあります、われらの供養はちいさなものでも、ほとけは最もなつかしいものとしておうけ下さるのであります。

次に「我座常に掃ふ、何況んや佛室をや」とは住についての心得、「わが衣時に裁つ、何況んや佛帳をや」とは衣についての心得であります。

われらの部室は毎日掃除するのであります。塵埃のなかに住むことはいやなことで、それであれば佛室すなはち佛壇に塵があつても掃はないやうでは淋しいとです。またわれらは季節季節に新しい衣服を裁つて縫ふのであります。してみればたまにはお内佛の御戸帳を新にするといふことを忘れてはならないのであります。

### 生命の光、こゝろの花

「香は須らく清浄なるべし、燈は須らく明朗なるべし、花をして枯らさしむることなかれ、器をして穢さしむることなかれ」これは香花燈明の供養についてのたしなみを示されたものであります。

さゝげる香は清浄なものがよい、さゝげる燈は明朗なるがよい、お内佛から

匂ふきよらかな香の薫は一家のものゝ身をも、こゝろをも淨化してくださるのであります。お内佛の燈明のあざやかに光るのはさながら生命の光の生ける象徴であります。

お内佛の花を枯らさないやうに氣をつけよ、お内佛の器のよごれないやうにみがけよ、お内佛の花の枯れてゐるのはこゝろの華の萎んでゐるやうに淋しいものであり、お内佛のうつはものゝ穢れてゐるのはいかにも身たしなみの行届かないやうなあさましさを示すものであります。

裏の庭にさいた草花を、まづお内佛へさゝげてひざまづくとき、そこにおのづから尊いなつかしい氣分がめぐまれてくるのであります。衣服に香水をふりかけるだけの用意をわすれないのに、お内佛の香を忘れることは落つけないことでもあります。

お内佛を莊嚴せうこんすること、お内佛に供養くやうすることは、そのまゝ御光みひかりに養やしなはれることとであります。そのまゝ聖きよい品格ひんかくを育てそだて、いたゞくこととあります。

### 眞諦しんたいと俗諦ぞくたいの相資さうし

このお内佛に給仕じゆしするこゝろを執持しゆぢして毎日の生活をなすべきであります。「更師教しけうを重おもんじ且世教かつせけうに従したがへ」とは佛にかしづくものは、おのづから善知識ぜんちしきの教へをまもり、人の人たる道を履ふむものであることを示されたのであります。

「師教しけう」とは眞諦しんたいのおしへであり「世教せけう」とは俗諦ぞくたいのおしへであります。眞諦しんたいと俗諦ぞくたいとは車の兩輪れうりんのやうであり、鳥の双翼そうよくのやうであります。

淨土じやうどへ召めされて行く一步々々はそのまゝ現世げんせに處しよする正しいみちであります。眞諦しんたいは俗諦ぞくたいをさまたげず、俗諦ぞくたいは眞諦しんたいをみだすことはないのであります。こゝに

「凡夫ぼんぷの生れつきのまゝの修道しゆだう」が趣おもたきふかく示されてあるのであります。家業かぎやうをばげみながら、職務しよくむにいそしみながら、そのまゝでよろこばれるお慈悲じひひであります。そのまゝ履修りしゆされる大道であります。よつて「家業かぎやうを妨さまたぐる莫なれ、深くこれを思慮しりよせよ」とささとされたのであります。

### 法喜ほふきの生活くわつ

こうして「佛ぶつ」に親したしみをもつことは、やがて「法ほふ」に親したしみをもつことになります。そして、「法ほふ」に親したしみをもつことは、われらの生活をうつくしく清めてくださるのであります。

淨土論じやうどろんをいたゞきますと淨土じやうどの莊嚴せうこんをたゞへられたうちに、「佛法味ぶつぽうみを愛樂あいりやくし、禪ぜん三昧さんまいを食たなす」といふことがあります。また、出世しゆせの五食ごじきのなかには「法喜ほふき

食」といふことがあります。いかにも趣おもむきのふかい生き方であります。われらは、朝な夕な、あさましいことを思ひなやんでくらししております、いかにも見苦しいことでもあります。さながら濁水だくすゐのやうであります。ところが、寶珠ほうじゆは濁水だくすゐのうちにも光つてゐるやうに、かゝる淺間あさましい生活のなかにも、若し「法」をいたゞき、「法味」を愛樂あいぎやうすることができたら、生活はおのづときよめられるのであります。

われらは名をおもひ利を愛してあかしくらしてゐるのですが、かゝるうちにも眞理しんりを愛し、法味をよろこぶことになれば、うれしいことです。埴生はにふの小屋のうちに佗たびながらも、しづかに念佛してほゝゑむでゐられる人々は尊いかざりであります。外ほかからつけくはへた喜悅きえつはほろび易い、けれども内から充みたされてわいてくるよろこびは床ゆかしいものです、「佛法は一人ゐてよろこぶ法なり」と蓮如上人

は仰おほせられました。一人ぼつちになつても、につこり心からほゝゑむことのできる人は仕合せであります。そこで、私たちは「法喜」をこゝろの糧かてとなし「法味」を愛樂あいぎやうされるやうに心がけたいものであります。「法」に親したしむ生活は、いつのまにやら「法」をわがものとして領得りやうとくすることができるのであります。

### 聞もん法はうと聽ちやう受じゆ

さて、「法」に親しむことは、まづ「法」を聽聞ちやうもんすることから出發するがよいとおもひます。

聞思修もんししゆといふことがあります。これは「法」を領納りやうのうして履踐せんして行く方法として自然しぜんなものとして依用えようされました。そしてこの修道しうだうの第一歩として「聞」をかゝげ

られたことが注意すべきことであります。しづかに「法」を聴くことによつて、心の眼がしづかにひらけてくるのであります。何となれば、「法」は聖なるものゝよび聲であるからであります。私たちはつねに聖なるよび聲をきゝおとさないやうに用意しておきたいものであります。

ところが、われらは悪魔のさゝやきには敏活に注意してゐます。どんな、ちいさな囁きでもきゝおとさないのではありません。けれども聖なるものゝよび聲はきゝおとします。大千世界に響流してゐる正覺の大音をもきゝおとしてしまふのであります。これは氣をつけなくてはならないことであります。

釋尊のお弟子達を聲聞衆と申します。これは佛の音聲をしづかに聴聞して培はれる人々といふことであります。われらもまた床しい聲聞衆としてくらしたいものであります。

むかしから、聽法若くは聞法といふことが、大切な入信の方法として、若くは信受の姿として注意せられたことは、まことに正しいことであります。われらの生活にこの聞法の時間が乏しくなつて行くことは、その生活の荒蕪して行く所以でないかとおもひます。この點において各地にいろ／＼の講座の催されることはうれしいことでもあります。殊に近頃、放送局において試みられてある朝毎の聖典講義のごときは頗る意味ぶかいことであると隨喜せず居れないのであります。

佗しい生活にしひたげられて、奔命につかれてゐる今日の人々は、ゆつくりとお寺にまゐるとか、法苑に列するとかいふ、のんびりした餘裕をもたないのであります。かゝる忙しいなかさまよふてゐる人々が、朝の三十分、ほんのわづかな時間に、家庭にありながら、聖典の講義を聴聞して、法味を愛樂するといふことは、まことにめぐまれた近代生活のたまものであります。



讀經と寫經など

尙ほ、經典に親しむことが法に親しみをふかめる有効な實踐でありませう。いつのまにやら聖典はたゞ僧侶の手にするもので、一般の人々の手にするものではないやうに、敬して遠ざけられてゐるやうな感じがいたします。これはまことに遺憾なことでもあります。

經典に親しむといふ姿は、手ぢかなことで申しますと、經典を讀誦し、若くは經典を書寫することでもあります。むかしから、わが國の人々が、この讀經とか寫經とかいふことによつて、どれだけ生活を豊かにしたことかわかりませぬ。

尤も、かゝることは忙しい一般の人々に普く行はれるといふことには、いろいろの困難もありますが、それでも、心がけのふかい方々は近頃でもこうした方面

に心をとめられるやうになつたことは、うれしいことでもあります。

これはある女學校のことであるとき、及んだのであります。卒業生の記念習作として、二卷の觀音經を書寫させるといふ慣例をつくつたのであります。そして、その一卷は父母にさへ上げて孝養の慈恩にむくひ、その一卷は、本人が結婚するときに奉持して行くといふことに規定されてあるといふのであります。これはまことに趣のふかいことであり、また有難いことでもあります。こうした女學生にはきつと、どこかに美しい聖觀音の風格と氣品がしみついてくることを信じて疑ひませぬ。

「水を掬べば月手にあり、花を弄すれば香袖に満つ」とか申します、つゞしみふかく觀音經を寫す若い女性には、春の夜の月のやうにきつと光輪の暈が翳されることでありませう。

聖典の輪讀

最後におすゝめしたいのは、聖典の輪讀といふことであります。

月に二回とか三回とか、親しい人々が五六人ほど集まつて、心靜かに有縁のお聖教を輪讀なさるのがよいとおもひます。一人がしづかによんで行かれるのを、餘他の人々はつゝましく聴受する。そして、みんなが咀嚼しながら、その法味を語り合ふことは趣のふかい試みであります。

かつて、こうした試みを私の寓においてはじめたことがありました。

それはもう二十年ばかりも昔しの事です。佛敎大學にゐた頃です。土曜日の夜など因縁のある學生の方々が五人十人づゝ自然に集つて來られた。そして一同が輪になつて親鸞聖人の御消息集から讀みはじめました。雨のふる夜もいゝ、月の

すむ宵もいゝ、さながらみんながお聖人の御膝元に集つておさとしをいたゞくやうに感じたことでもあります。その頃ころに集られた方々は今日でもみんな光つてゐられるやうな氣がいたします。

依つて、私はこれを、どなたにもおすゝめいたしたいとおもふのであります。

僧寶と善知識

終に「僧」についての親しみをふかめることは大切なことでもあります。こゝにおいて「僧寶」に對する恭敬と親近は修道のうへにおいて、大切なことゝなされてあります。

「人」においては「人」ほど活きた接觸をもつものはありませぬ。そこで「よき人」をとほして「正しい法」を仰ぎ、「尊い佛」にかしづくことが、きはめて具體的な

修道の手順であります。

宗教的な人格に向つて親近すること。宗教的な生活に對して近接をなすこと、こゝにおのづからあらはれてくる感化といふものはまことに力強いものであります。これによつて、むかしから「善知識」といふことが修道の過程に重要な地位を占めてきたのであります。蓮如上人は五重の義といふものを組織なされまして、宿善、善知識、光明、信心、名號といふ風に次第あらせられました。これをみましても善知識の重要な地位をうかゞふことができます。

ところが、近頃においては「僧」に對する親しみは夥しく缺如してゐるかのやうであります。佛教に對する疎隔といふことも、實は僧侶に對する疎隔といふことが重要な理由になつて居るのであります。さて、この見失はれたる僧への親しみをいかにして取かへすべきでありませうか。ありていに申しますれば、三寶の

ひとつとして恭敬されるやうな僧侶は今の時代に見出されないのかも知れませぬ思ひ切つていへば僧侶の如法ならざる實際生活のかなしい暴露があらはれてくるので、社會一般の人々をして「佛」と「法」に對する親しみを見失はしむるやうになつてゐるのかも知れませぬ。これについて私たちは深く慚愧しなくてはなりません。僧界の風紀を肅正し、僧侶の行持を如法ならしむることに、日夕省察をつゞけて、精進しなくてはなりません。

「僧」に對する親しみをふかめるには、まづ、親しみうるやうな「僧」の風格をあらがやかにみがき出すことが大切であります。これについてはかぎりなき責を負ふべきことを私たちは銘心しております。

けれども、道を求めなされる方々、道を修めなされる方々には、また、別個の用心を要するかとおもふのであります。すなはち、あらゆる手がりのうちに有縁の

「僧」を見出し「よきひと」を見出し行くだけの聰明と謙虚とがあらねばなりません。敬虔にして敏明なる求道の行人のまゝには、すべての人々が善知識となるといふことも深く注意しなくてはならないのであります。かの善財童子がすなほに掌を合して五十三の善知識を見出して行かれたことはふかく注意すべきことでもあります。この五十三の善知識のなかには世間の常識ではとても善知識としてうやまはれそうにない人々もあるのであります。しかるに、これらをすべて尊い善知識としてうやまい、しづかにその教へをうけられたところに、正しい求道の態度があらはれてゐるのであります。

現在の世上にも、われをみちびいてくれる「僧」はゐないと、慌しく失望するよりも、まづ善財童子のやうな敬虔なこゝろもちをもつて行けば、現在でも相當にありがたい善知識としての僧寶の存在に眼ざめることでありませう。況んや、

邪見と驕慢の悪心を以つてゐては、すべての僧寶も見失はれてしまうのでありませう。

浄土の門はつねにひらけてゐるのです。たゞ閉されたものは私たちの眼の扉だけであります。こうしたことをも、すなほに反省して、よき人々に親しみをもつて聖化の生活をふかめなくてはなりません。

### 先徳の芳園を慕ふ

尙ほ、これを現在の僧寶にのみにかざる必要もありませぬ。しづかに、首をめぐらして過去の僧寶を勧請することも亦た適切な試みのひとつであります。そして、それは過去にほろびてしまつたのでなくて先聖と古哲の足跡はいまなほ眼前にふかい印象をのこしてゐるのであります。昔の行人がうや／＼しく「佛足

「跡」を拜んだころもちを、うけづき、これを押しひろげて先聖と古哲の尊い足跡を拜み、その行蹟を偲び、その餘光を仰ぐこと僧も寶をとほして法界に參入して行く適切な試みであるとおもふのであります。

私たちもこれに氣づきいろいろな機會をとらへて、宗教的な聖蹟の巡拜を企てゝおります。そして、この巡禮をもつて同人と同信の修道の行事のひとつとしております。あるときは東關の聖蹟に親鸞聖人を慕ひ、あるときは北陸の聖蹟に蓮如上人を偲びました。あるひは南越に道元禪師をまなび、あるひは深草に元政上人を想ふのであります。こうした聖蹟をころしづかに辿りながら掌合せて念佛するとき、いつしか心の眼がひらけてまゐります。また聖胎の長養もできるのであります。かゝる先聖のみあとを慕ふことが、そのまゝ先聖に遇ふ辿りである、同行の人々はみんなよろこんでゐられます。こうしたことなども僧への親し

みをふかめる。具體的な實踐のひとつであらうかと存じます。

先聖の足跡は今もなほ朽ちないで靜かに光つて居ります。その足跡を辿つて行くことは、おのづから法界に近づくことになるのであります。仍つて、かゝることも「人」をとほして「法」にちかづく試みであります。

その他にも、いろいろの試みはありませう。こうして「僧寶」への親しみをとりかへし、「法寶」への歸向をふかめ、「佛寶」への瞻仰をつよめることができ、篤く三寶を敬ふに至りますれば、ここに、おのづから聖化の機縁が順熟して、宗教を信ずることができるようであります。

新しき宗教生活 終

昭和十年十一月五日印刷  
昭和十年十一月十日發行

著者 梅原真隆

發行者 堤淨祐  
京都市猪熊通梅小路上ル

印刷所 株式会社文化時報社印刷部  
京都市猪熊通梅小路上ル

終

